
東京特居許可局

宇佐美

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東京特居許可局

【Nコード】

N6899G

【作者名】

宇佐美

【あらすじ】

ある夏の公務員の日常風景。東京特居許可局に所属する彼らの職務内容とはいったい？若手社員の孝太とベテラン社員若松のドタバタコメディ。

（前書き）

タイトルの早口言葉にホラータッチの稚拙なストーリーをくっつけたギャグ小説です。直接的ではありませんが、会話の中に若干の性的表現が含まれる部分があり、下ネタも含みますのでご注意ください。笑っていただけると幸いです。処女作なので期待しないでください。

「ここ冷房ききすぎじゃないですか？」

デスクの上のノートパソコンに目をむけたまま、孝太は隣の席の若松へと語りかけた。

「あーん？ 寒いのか？」

若松は半そでのYシャツのボタンを緩めて、手にしたクリップボードをあおぎ、顔に風をおくっている。

「いえ、そういうわけじゃないですけど、総務から省エネ協力をお願いメールがまわってます。室温設定は28度にしてほしいそうです」

若松は露骨に顔をしかめた。

「けっ、民間じゃねーんだから、ケチくせーこと言ってるじゃねーよ。それに商売柄、俺たちは、寒さに慣れてなくちゃいけねーだろーが」

「最近、公務員への風当たりも強いですから、少しでも経費削減しようってことでしょ、しょうがないですよ。ちよっと温度設定みます」

そういつて孝太が腰をうかしかけると、若松は声を荒げた。

「いいつつーの。そんなメールほっとけよ。俺は暑いんだよ。どうしても上げたければ、午後、外回りに出る時にしろ」

「あれ？ 今日って外回りはいつてましたっけ」

孝太は何やら忙しくパソコンをたたいた。

「あー、予定には入ってねーぞ。臨時だよ。再調査してこいって、さっき保管室の前で課長に言われたんだ。ちっ、このくそ暑い日だよ」

そういつと若松は不在の同僚の席にクリップボードを投げ捨て、椅子にふんぞり返った。

「そうですか、まいったな、今日は内勤の日だったから、何も持っ

てきてないんですよねえ、どの物件まわるんですか？Aクラスとかなりきびしいな」

「S013」

「Sクラスじゃないですか！」

孝太の声がオフィスに響いた。

「あつぢー」

若松は、ズボンの裾を膝までまくりあげ、脛毛をむきだしにして歩いている。その後を孝太が、気乗りのしない表情でついていく。

若松ほどではないのかもしれないが、孝太にとっても、このアスファルトの照り返しの中、歩みをすすめるのは耐え難いものがあった。若松の姿をみつともないとは思いつつも、どこかでうらやむ気持ちもでてくる。

「もうよ、とつとと片付けてよ。直帰にしようぜ、直帰に。んで生ビールでも飲んでよ」

「そんなに簡単に片付くわけじゃないですか。Sクラスなんですよ？お願いですから、ちよつと家よる時間くださいよ。ちゃんと準備してからじゃないと絶対無理ですよ。それに僕、Sクラスなんて一度も回ったことないんですから。なまじ準備したって無理かもしれないのに」

孝太は、泣きそうな声をだす。

「心配すんなよ、普通のSじゃねえから」

若松は億劫そうに言葉をつづける。

「それ、単なる未調査物件だから」

「はあ？」

孝太が間のぬけた声をだすと、若松はふりむいてだるそうな目を見た。

「そのSクラスの申請したの俺だから」

そういう話は終わったとばかりに顔を前に戻して暑い暑いと愚痴をこぼしはじめる。

「いったい、どういうことですか？」

「だからあ、その物件、行くのめんどくさかったから。行ったことにして申請だけ上げたやつなんだよ。もう10年ちかくも前になるかなあ、あの夏も猛暑でな、ちよつと遠いし行く気しなかったんだよ。畜生、結局くそ暑い中、出向く羽目になるとは」

孝太は一瞬絶句した。

「なんてことを。ていうか、よくそんなに申請とおりましたね」

「ああ、当時は、Sでも二次調査とかなかったし、上のチェックもゆるくてな、しかも、Sで申請しときゃ、封鎖されて定期調査もやらないから、うってつけだったんだよ。本当昔はよかったなあ、まあ、さすがにそう何度もやるわけにはいかなかったけどな」

当たり前だよ、心の中で孝太はつぶやいた。Sクラス物件など、たとえ当局に10年勤めていたとしても1件出会うか出会わないかというぐらいのしろものなのだ。

「ちえ、なんで今更、再調査なんだろうーなあ」

そういつて若松は首をひねった。

陽が高い時間であるにもかかわらず、うつそうと木々がおいしげったそのあたりは随分と薄暗かった。金網に取り囲まれた病院とおぼしき廃墟が目の前にみえる。ところどころさび付いたその金網には、おびただしい数の奇怪な文字のかかれた札が張られ、危険！立ち入り禁止、東京都、と書かれた看板があちこちに見受けられる。「なんだか、すごいですね」

思わず孝太がつぶやく。

「まー、エセとはいえ、Sクラスの取り扱いだからな」

「うわ、この呪符の札、すごい強力ですよ。こんなの初めてみた」「記念にもらってけば？」

「なんの記念ですか？ 横領になりますよ」

「堅いやつだな。別にばれやしねーよ、こんなに一杯、馬鹿みたいにくつついんでんだからよ」

「ばれる、ばれないの問題じゃないです」

「ちっ、小心だな」

若松はつまらなそうにそういつて、なにやら金網をいじっていたが、唐突ににやりといやらしい笑みを浮かべてふりむいた。

「あー、わかった、おまえ童貞だろう？」

「な！そんなこと関係ないじゃないですか」

思わず孝太が暗に肯定と受け取れる返事をする、若松は声をあげて笑い出した。

「ぎやははは、そうかそうか、大卒ぼっちゃんも童貞か。まあ、気にすんなよ。今度競馬で勝ったら、いい店つれてやるからよ」

笑いながら、若松はきよきよと入れる場所を探している。孝太は、しばらく、顔を紅潮させてそれを見ていたが、気持ちが落ちていくと、廃病院に目をやり、じっとそれを品定めするかのようには眺める。

「……………それほど、危険な感じはしないが、とりあえず、中をさぐってみるか。」

孝太は、目を閉じて軽く手を広げると心の中で十字をきり、祈りをささげる。心の中に暖かい感情があふれ出してきて、閉じた瞼から涙をこぼれそうになる。

やがて、孝太には、生きとしいけるもの全てに降り注ぐあたたかな光があたりに満ち溢れていくのがわかった。ひろがっていく孝太の意識と共に光が降り注ぐ範囲もひろがっていき、やがて、それは廃病院まで辿り着いた。

光を拒む大小の影が建物の中にいくつか浮かびあがる。孝太はその影達に心からの同情をよせた。

「ちえ、入り口ぐらい残しとけよ、めんどくせーな。嚴重にやりやがって。おい、孝太、だめだわ。よじ登るしかねーよ」

そう言つて孝太のほうをふりかえり、その様子をみると口をつぐんだ。

「ふう」

しばらくして目を開くと孝太は息を吐いた。待ちかねたように若松が口を開く。

「どうよ？」

「結構、大きな建物ですが、特居対象の数はたいしたことないみたいです。いいところ20つて感じてした。ただ、数名は力持ちがいるようです、幸い好戦的な類ではなさそうですが」

「けっ、要処置だとしても、いいところBクラス物件だな」

「そうですね、もし処置するとなると若松さん1人でいけるかどうかは、微妙なところです。出直したほうがよくないですか？」

「いや、また、出直すのもめんどくせーから、とつと入って、とつと終わらせんぞ。はやく生ビール飲みたいしよ」

そういうと若松は、身軽に金網によじ登り、しかたなく孝太も後につづいた。

「孝太くうん」

若松はやさしく孝太に語りかけた。

「す、すいません」その声にびくびくと孝太があやまる。

ここ数年同じ班にいる孝太は、若松がこういうやさしい声を出す時は、相当頭にきてる時だと知っていた。

「これのどこが、いいところ20なのかなあ？」

廃病院に入ると、いきなり目にしたのはおそろしく大量の幽霊だった。大して広いスペースではないものの、受付の前にはあふれん

ばかりの幽霊達がたむろしている。

「目に付くだけでも、その倍はいるじゃねーか。これじゃあ、建物全体には、いったい何匹いるってんだよ。調書とるにせよ、ぶんぐるにせよ、絶対一日じゃ終わんねーじゃねーか。どーすんだ？

ああ？ 生ビールはいつ飲めるんだよ、ごらあ」

猫なで声から、一変して、凶悪な表情で孝太にどなった。

「ひっ、す、すいません。おかしいな、こんなはずは。」

孝太は、冷や汗をかきながらも、なんとか心を落ち着かせ、目をして祈りをささげる。若松の怒声が遠のいていく。光がふたたびふりそそぎ、孝太は病院内を心の目でみわたした。

「……やはり、影は20程度しかない。でもさっきの大量の幽霊は、いったいどういうことだ？ あ、そうか………いでっ。」

「だんまりか、このやろう」

若松が孝太の頭をはたいた瞬間、思わず孝太は目を開いていた。

「い、いたい、ごめんなさい。わかりました」

「なにがわかつたってんだ、このやろう」

ふたたび、若松が頭をはたき、孝太の目には涙がにじむ。

「や、やめて。この人たち、特許対象の地縛霊じゃないです、たぶん、浮遊霊の類ですよ。あんまり、存在が微弱だから、わからなかったんです」

叫ぶように孝太がいうと、やっと若松は、たたく手をとめた。

「なんだと？ こいつらが浮遊霊だと？ 全然らしくねーぞ、妙に居ついた雰囲気じゃねえか。ちっ、めんどくせーな。こんなところいやがつて」

「生前ここに通院してた人たちでしょうね。まわりが封鎖されちゃったから、出るに出れなくなったんでしょうけど………、めずらしいな、こんなに落ち着いた浮遊霊って」

「くそつ、これじゃあ、俺には、特許と浮遊霊の区別なんてつかねーぞ」

「わかりましたよ、僕が調書とつてきますから、待っててください」それを聞いた途端に若松はにやりと笑みをうかべた。

「そうか、悪いな。後で生ビールおごってやるから急げよな」

「はいはい、なるべく早くすませます」

「おう、頼んだ。俺はそこで寝てるから」

そういうと若松は、受付前の長いすに向かう。そこに座っていた霊を唐突になぐりつけてどかすとゴロリと横になった。拍子に放屁の音がきこえる。孝太は大きくため息をついた。

「……しょうがない、はやくおわらせてしまおう。」

瞼を思いつきり強く閉じると歯を食いしばり、全神経を目のあたりへと集中させる。孝太の眼窩のあたりを走る血管が異常にせりあがってくる。しばらくそうしていると、ふと一瞬、あたりの全ての喧騒がとだえた気がした。

よし

かっと目をみひらくと、それまでの色彩を帯びた世界は掻き消え変わりに白い陰影だけで表現された世界が広がっている。たむろするあわい水色の幽霊たち、その中に受付に座る青く光るナースがいる。……まずはあるからいくか。

「すいませーん、ちょっとお時間いただいてよろしいですか」

そういつて、手帳を片手ににっこり笑いかける。調書の必要事項を聞くのもこれで一体何人目になることだろう。すくなくとも半分はおわったはずだが。

1Fの特許対象の調書を一通りとった孝太は、今は、2Fへとうつり、入院患者とおぼしきお爺さんの霊に声をかけているところだった。

『なんですかいのう？ おや、浩介か？ おおきゅうなつたのう』

「いいえ、ちがいます。私、こういうものです」

そういうと孝太は、身分証を提示する。怪訝そうにお爺さんがそれを覗き込んだ。

「おやおや、おまえさんは、舌をかみそうな名前じゃのう」

「そっちはうちの局の名です、私の名前はこっちです」

身分証の自分の名前を指し示す。

「トイレにいききたいのう」

「すぐおわりますから、ちょっとお時間ください」

「おや、おまえさん浩介かえ？」

「だから、ちがいます。まずはお爺さんのお名前と、おわかりでしたら死亡年月日お伺いしてもよろしいですか？」

「浩介や、トイレにつれてってくれんかのう？」

「だから」

孝太がお爺さんの霊相手に苦戦していると、階下から、突然鋭い女性の悲鳴があがった。

なんだ？

耳をすますと、階下からドタドタと走る音と甲高い女性のわめく声がかこえる。ただでさえ、夏場とも思えないほど低い病院内の気温が急速に下がっていくのがわかる。

「トイレはどこだったかのう」そういいながらお爺さんがふらふらと近くの病室へ飛んでいく。

走る音がだんだんと近づいてきて、若松の声が聞こえてきた。

「ちよつとさわっただけだろーが。減るもんじゃなし、大げさなんだよ、馬鹿女」

「な、な、なんですって！ 待ちなさいよ、この変態。絶対ぶち殺してやる」

廊下の先に姿をあらわした若松が孝太に気付くと走りよってくるのがみえた。なんだかすごく嫌な予感がする。少し間を置いて、さきほど調書をとった覚えのある若いナースの霊が恐ろしい怒りの形相をみせてあらわれた。

「こう、た、助けてくれー」

若松は、喘ぐようにそういいながら、孝太の脇を走り抜けると、廊下の角をまがっていく。呆氣にとられてその後ろ姿を見送ると背筋にぞくつとする感覚がはしる。あわてて振り返れば目の前に恐ろしい怒りの形相の女の顔があった。

「ひ、ひいい」

思わずじりじりと後ずさる。集中がとけて、あたりに色彩がもどってくる。若いナースの霊は、こちらを見定めるようにねめつけると、ほんの少し表情をやわらげて、孝太に問いかけた。

『あなた、さっきの役所の人ね。そう、あなた、あなたもあの男の仲間なの？』

「ち、ちがいます」

孝太がふるえながらもそういいきつた、まさにそのタイミングでひよっこりと廊下の角から若松が顔をだした。

「孝太、大丈夫か？」

背後にその声を聞いて、孝太ははなじろんだ。多少やわらぎつつあった、女の顔がみるみる恐ろしい形相へともどっていく。

『やっぱり、あんたもあの男の仲間なのね』

「ちよ、お、おちついてください」

孝太が、なんとか落ち着かせようとおしとどめるように手のひらを押し出すのと、ナースの霊が孝太につめよるのが同時だった。

孝太の手のひらが若いナースの胸に吸い込まれていく。若いナースはぴたりと動きをとめ、静かに顔を下げて孝太の手をみつめた。

孝太はその体制のまま、固まっている。

「あ、あの、わざとじゃないんです」

おそるおそる語りかけると、ゆっくりとナースが顔をあげる。その表情は、もはや、人としての原型をとどめてはいなかった。

『ゴ、ロ、ジ、デ、ヤ、ル、ゾ。ゴノ変態ドモガアアア』

ナースの怒りの雄たけびが病院内に響き渡り、パラパラと天井から、ほこりが落ちる。

生前はなめらかだったであろうその髪は、蛇のごとくに四方八方に宙にうごめき、生前は美しかったであろうその両の目は目玉が飛び出さんばかりに押し広げられ、生前はふくよかであったろうその頬は、そこまで裂けあがった口の侵食をうけていた。

「ぎえええ」

孝太は叫びながら、綺麗に180度ターンすると、全力で走りだした。大学の霊交渉術のシスターの言葉とその場違いにこやかな笑顔が唐突に思い起こされる。

（いいですか、みなさん。霊というものは生きているときよりも感情の起伏がはげしくなっているものです。交渉の際は、決して刺激するようなことをしてはいけませんよ。）

しちやいましたあ、そんな時はどうしたらいいでしょうか？心の中でそう叫ぶが、もちろん答えは返ってこない。すぐに若松においつくと二人並んで廊下を疾走する。

「おいおい、孝太。おまえもやるじゃねえか。で、感触はどうだった？」

「あれは不可抗力ですつ。それに、僕には霊に触れる力はないの知ってるじゃないですか。それより、若松さんいったい何やらかしたんですか？」

「俺は、たいしたことはしてねーよ。ケツなでてやっただけだ」

「な、なんでそんなこと？」

「だって、美人だし、いいケツしてるし、霊だから、別に痴漢の罪にも問われるわけでもないしな。いっかなーって。まさか、あんなに怒るとはなあ」

「ちょ、霊交渉術の単位とかちゃんととってんですか？」

もつとも、きちんととってる孝太もこのざまではある。

「俺の時代にはそんなものなかったよ、そもそも、俺は高卒だ」
前方に階段が見えてくる。1Fにおりれば何とか逃げ切れる。

孝太の胸に希望が生まれかけたところで、目の前の階段に別のナースの霊が現れた。こちらに顔を向け、若松をみとめると怒りの形相を浮かべた。

『見つけたぞ、痴漢野郎』

二人はぴたりと立ち止まった。

「ま、また怒ってるのがきたんですけど、あ、あの人には何を？」

「あー、１Ｆで逃げまわってる最中、目についたから、スカートめくってやった。」

「ど、どうして、また、そんなことを？」

「いや、１人に追いかけられるも２人に追いかけられるも同じだろって、一瞬思っちゃっのかな？ つい。まさか、はさみうちになるとは……」

「僕、無事に帰れたら転属願います」

『オイツイダゾ、変態ドモオオ』

背後からさきほどの若いナースの霊がせまってくる。

「ひい」

孝太が頬を両手ではさみ絶望の悲鳴をあげる。

「こ、こつちだ、孝太」

若松は、孝太の手をひっぱると、手近の部屋に飛び込んだ。

「なんでですか？」

「なにがだよ？」

「なんで女子トイレなんですか？」

「わざとじゃねーよ。一番手近なのがここだったんだよ！」

２人が逃げ込んだ場所は、女子トイレだった。ドアや窓を中心にいつのまにやら若松がちよろまかしていた呪符を大慌てで張り巡らせたところだった。

目下のところ安全は確保できたものの、疲れきった二人は、トイレの床に座り込んでいる。

「若松さんは最低です」

「うるせーな。情けない悲鳴あげてただけのくせによ。

でもよ、あいつらを冷静に話しができる状態に戻すのは至難の技だな。こりゃ、もう調書どころじゃねーわな。」

「誰のせいですか。」

孝太が声をあらげる。

「うるせーな、おまえだって胸もんでただろーが。」

「もんでないです、手が突き抜けただけです。それに、不可抗力です。」

「俺だって、不可抗力なんだよ。」

「じゃあ、若松さんは、変態です。」

「なんだと」そういつて若松は手をふりあげたが、目に涙をうかべながら睨みつけてくる孝太をみて、力なくその手をおろした。

「もう、処置に切り替えるしかねーかな。」

「聖書も、聖水もないです。何の準備もしてきてないから、僕は手伝えませんよ。」

孝太は膝をかかえて、そこに顔をうずめた。

「そのぐらい常に持ち歩いとけよ」

「以前はそうしてました。いつだか内勤の日に、僕の聖書にパラパラ漫画を書いた人がいたので、それ以来、必要なく持ち歩くのは控えるようにしてるんです。誰だか知りませんがその人にはいずれ必ず神罰が下るものと信じています」

じつと若松を睨む。

「じゃあ、処置も無理か」

特に動じた気配もなく、若松はつぶやいた。

「なんで、ですか、若松さんが除霊すればいいじゃないですか」

法衣に身をつつみ、聖書と聖水でもって、霊を成仏させる孝太の浄霊処置に対して、若松は気を込めた拳による豪快な体術でもって、霊を消滅させる除霊処置をおこなうことができる。道具など、準備の必要な孝太と違い、若松はその身一つで処置ができるはずだった。

「馬鹿、いくら俺でも、霊とはいえ、女を殴ったりはできねーよ。」
そついうと若松はうつむいた。孝太も若松にそれを強いる気持ちはおきない。そもそも孝太は常々霊を成仏させるのではなく存在を消滅させる除霊という行為を好ましくは思っていない、常々若松に除霊をさせないように配慮をしているぐらいだった。

突然すくつと若松が立ち上がり、孝太は力なくがそれを見上げた。
「除霊……やるんですか？」

「いや、便所。それにしてもよ、なんか小便器のないトイレって妙な感じだよな。」

若松は部屋をみまわしてそついうと、ズボンをカチャカチャと下ろしながら個室にむかった。

「もう、ズボンおろすのは個室はいつてからにしてくださいよ。」

孝太は膝に顔をうずめた。

『きゃー』

「わー」

唐突に叫び声がして驚いて顔をあげると、ブリーフ姿の若松とその先に開け放たれた個室の隅で震えている女性患者とおぼしき霊の姿があった。

「なー孝太」

ズボンをはいた若松はトイレのドア窓から廊下を覗いている。女性患者の霊は個室に閉じこもって、堅くドアをしめている。

「なんですか。彼女達いなくなっただんですか」

孝太は相変わらず顔を両膝の間にうずめたまま、力なく答えた。

「いや、まだいる」

「すこしは落ち着いてるようにみえます？」

「いいや、まだ怒ってる」

孝太はため息をついた。

「いったい、どのくらい時間がかかるか想像もつかないですけど、

落ち着いてくれるのを待つしかないですね」

若松は一瞬黙り込む。

「いや、そうでもないぞ。一か八かだが、一つ方法を思いついた。

孝太、一口乗るか？」

孝太が顔をあげる。

「そりゃ、この状況をなんとかできるのなら。でも、どうするんです？」

「一口乗るならベルトを貸せ」

「はあ？」

「いいから、はやく」

わけもわからず、立ち上がってベルトをはずすとドアに近づき若松に手渡した。ドア窓から外の2人の形相がちらりとみえる。

「そこに立っててくれ」

若松はそういうとドアの前を指し示した。

「いつたいなにを？」

言われたとおりの場所に立つと、若松は片手に孝太のベルトをぶら下げたまま、ドアノブに手をかけた。

「な、なにをする気ですか？」

いったい何を思ったか、若松は突然ドアを思いっきり開け放った。途端に怒りの雄たけびをあげつつ2人のナースが飛び込んでくる。

「ぎゃあ」

孝太が絶叫する。

ナースの手をかわした若松は、孝太に向かってダイブすると、あとずさりしかけた孝太のズボンに飛びつき、それを力一杯ひきずりおろした。

ズボンの止め具がはずれ、ズボンと共にトランクスまでずりおちる。その瞬間、飛び込んできた若いナース達の怒りの雄たけびが黄色い悲鳴に変わり、怒りの形相は恥らう乙女の表情に変わり、あわてて両手で顔を覆う。だが、孝太にはその指の隙間から、しっかりと自分の下半身を凝視しているのが見えた。

「きゃあ」

孝太の悲鳴が、ナースの悲鳴に加わり、若松は腹を抱えてトイレの床に転がった。

痴呆のお爺さんに苦戦したものの、特許対象者の調査報告書をすべてとると、孝太はほっと一息ついて、1Fへとおりていった。

受付にもどると、浮遊霊たちに囲まれて、若いナース2人とバカ松が談話しているのがみえる。

「いやー、看護婦さんだからさあ、見慣れてるかと思ったんだけどさ」

「んもう、やだあ、そんなことないわよ。確かにお爺さんのは見慣れてるのかもしれないけど、それにしたって、ねえ」

「そうよ、もう、びっくりしたわよ、本当、若松さんって最低よ」

「ごめんごめん、お詫びに今度、俺のも見せるから」

「きゃー」 「きゃー、やめて」

この場から消え去りたい。孝太は心底そう思った。

2人のナースは孝太に気付くと顔を赤らめつつ熱い目でみってくる。孝太は視線があわないうちにうつむいてから、歩み寄った。

「バ、若松さん、調書全員分おわかりました」

「おー、ごくろうさん」

孝太にそういうと、ナース達にむきなおり笑いかける。

「んじゃ、おじさん達は帰るわ。2人ともまたな。大丈夫、ここは保護物件ってことで申請と通してみせるからさ。近いうちにまわりの息苦しい札も撤去されるよ」

「助かるわ、よろしくねー。孝太さん、絶対また来てね、約束よ」

もう2度ときません。心の中で孝太は答えた。手をふる2人に見送られ、孝太はバカ松と共に廃病院を後にした。

「いやー、ちゃんと話せばいい子たちだったよなー」

駅へと向かう道すがら、若松はご機嫌だった。

「二度とあんな真似しないでください」

孝太は暗い声で言った。

「おう、今回は本当悪かったよ。やっぱさ、いきなりタッチは駄目だよな。まずは、トークで盛り上げてからじゃないと。どうも、歳とるとそこらへん気が短くなっちまって、困るぜ本当に。」

孝太は黙ってうつむき加減で歩いている。

「よし、んじゃ、約束どおり、生ビールおごってやるぞ。ついてこい。」

いいだろう、今日はとことんだ酒かつくらってやる、孝太は胸の中でそう堅く決意すると無言で若松についていく。2人の背中が夜の街へと消えていった。

平和な一日である。

若松が有給をとっているせいもあり、外回りの予定がなかったこともあり、たまっていた事務仕事が大いにはかどる。夢中で仕事をしていると、ついさつき昼をとったばかりと思っていたのだが、気付けばオフィスには夕日がさしこんできていた。

今日は定時にあがれそうだな。

季節がら忙しく、大半が外回りにでているようで、孝太はただ1人、28度に設定されたオフィスでパソコンにむかっている。

外回りの人間が帰ってきたのか、入り口のあたりが少し騒がしくなった。

「もどりましたー」

その声と共に同期の沢村と先輩の宮元がオフィスに姿をあらわした。

「おつかれさまです」

気分のいい孝太は笑顔で出迎える。

「いやーあつかった。あつかった」

宮元はそうぼやきながら、自分の席へむかい、沢村はペットボトルを片手に、こちらへむかってくる。

「おつー。鈴木、はいこれ」

首をかしげながら、受け取ると、あの廃病院の2次調査書だった。自然と顔がこわばっていく。それをみて沢村はやや怪訝そうな表情をうかべた。

「別におまえの1次調査書に不備はなかったぞ。まー保護物件ってことで再申請も問題なく通るだろうよ。でもさ、おまえと若松さん、随分あそこで受けがいいんだな。いったいどんな調査したんだ？

あの2人は今度いつ来てくれるんですか？　って聞かれたぞ」

孝太はデスクに突っ伏した。

「おい、どうした？」

あわてて沢村が肩をゆさぶる。

「頼む、ほっといてくれ」

「なんだ？　随分疲れてるみたいだな？　ま、あんまし根つめんなよ。まだまだ夏はつづくぜ」

そついうと沢村は喫煙室の方へと消えていった。しばらくそのまま突っ伏していたが、氣力をふりしぼって立ち上がるとS013のファイルを探しに行く。

廃病院の案件も、あとは、以前の若松の申請書と一緒に閉じて再申請にまわすだけ。そうすれば、もう、話題にのぼることも、少なくともしばらくの間はないだろう。

書類の保管室にはいると淀んだ空気にむかえられる。さほど数のないSクラス物件のファイルをみつけるのは、そう難しくはなかった。

閉じられた書類をめくっていくとやたらと調査報告の記入箇所が白紙のままの申請書が目にとまる。申請番号S013。そこには、ただ一文だけ記載があった。

近づくな　平将門　これにあり（字余り）

顔を引きつらせながら担当者欄へ目をうつす。

担当 若松（beat）武

適当にもほどがある・・・

握力を失った手からファイルが床へと落ちていく。

拾いあげる際、その申請書の右下の隅にでかでかと押された局長の認め印が目にとまると、孝太は転職を考えはじめた。

東京都特殊居住者権利申請許可局。通称、東京特居許可局。

それは、死後の人権問題について議論活発であった1999年当時、死後の人権擁護を求める世論を受けた形で、意欲あふれる新任の都知事により、半ば強引に東京都に新設された地方自治体の機関の一つである。

主として死後の居住権の擁護を目的とするこの機関は、設立当初こそ、その必要性を疑問視する声もあったものの、現場局員の地道な努力の甲斐もあって、現在はその呼びにくい名称を除けば、都民からの評判は上々である・・・・・・らしい。

終わり・・・・・・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6899g/>

東京特居許可局

2010年10月8日15時10分発行